

水産学者山川洵に関する研究

—男爵山川健次郎長男の功績—

遠藤 由紀子

1. はじめに

昭和7年(1932)3月、関東軍は清国最後の皇帝溥儀を執政として、満洲国の建国を宣言した。本論文では、昭和初期に満洲へ幾度も足を運んだ水産学者山川洵^{まこと}を取り上げる。

山川洵は明治16年(1883)2月23日に東京で生まれ、太平洋戦争中の昭和18年(1943)に亡くなった。父は会津藩出身の山川健次郎(1854~1931年)¹であった。筆者は、会津藩家老を輩出していた山川家²に関して、近代以降の動向の調査を進めている³。戊辰戦争で敗北した会津藩であるが、山川家は近代教育の進展と皇室に接点のあった一族であり、近代国家形成期を探る研究対象として重要であると考えている。

洵は東京帝国大学を卒業し、水産講習所⁴と東京帝国大学農学部⁵に勤務した。管見によれば、洵については学歴または職歴程度しか知られておらず、これまでの研究で詳細に調査されたことはない。父健次郎に関しては、遺稿集⁶をはじめ、列伝や伝記⁷が数多く存在する。近年でも健次郎を主題とした啓蒙書⁸や日記写本が翻刻⁹されたり、国会の施政方針演説⁹で言及され、時代を経ても注目され

- 1 健次郎は会津開城後、明治4年(1871)にアメリカへ国費留学をし、イェール大学で土木工学を修め帰国、のち東京帝国大学初の物理学博士号を授与された。明治34年(1901)に東京帝国大学総長となり、九州帝国大学、京都帝国大学の総長を歴任した。貴族院議員・東宮学問所評議員を務め、明治専門学校(現九州工業大学)や武蔵高校など学校の設立にも多く携わった(星2003、大竹他編2013等)。
- 2 研究対象は、幕末期の山川家を生きた7人の兄弟姉妹が中心であった。すなわち、長女二葉(1844~1909年)、長男浩(1845~1898年、旧名大蔵)、次女ミワ(1847~1932年)、三女操(1852~1916年)、四女常盤(1857~?年)、次男健次郎、五女捨松(1860~1919年)である。
- 3 例えば、健次郎の兄弟姉妹については①長女二葉に関する論文(遠藤2010)、②次女ミワに関する論文(遠藤2018)、③五女捨松に関する論文(遠藤2019)などがあり、④長男浩に関する調査結果について、「鳥羽伏見の戦いと山川浩」として歴史文化講座を実施した(於会津若松市歴史資料センターまなべこ、共同発表者中野健氏、2018年5月)。鳥羽伏見の戦い後、長男浩は紀州に敗走し発病、御坊の中吉旅館(中野氏の曾祖父中野吉右衛門が経営)で闘病した。明治期になっても御坊と交流があった事実(水害見舞いの手紙や御礼として送った九谷焼や会津塗が平成29年(2017)に発見)を報告した。調査の詳細は他稿にまとめる予定である。
- 4 水産講習所は、明治21年(1888)設立の水産伝習所を改組・改称して、明治30年(1897)に農商務省が発足させた。昭和24年(1949)に東京水産大学となったが、平成15年(2003)に東京商船大学と統合し、東京海洋大学となった。
- 5 『男爵山川先生遺稿』(故山川男爵記念会編、1937年)。
- 6 存命中より多くの列伝に紹介されており、「理学博士山川健次郎君小伝」(『帝国博士列伝』萩原善太郎編、1888年、岡保太郎)、『人物画伝』(大阪朝日新聞社編、有楽社、1907年)、「山川健次郎—14歳で外国に留学した秀才」(『東西名士立志伝：独力奮闘』大日本青年教養団編、朝日書房、1926年)などがある。単行本には『男爵山川先生傳』(花見朔巳編、故男爵山川先生記念会、1939年)をはじめ、『山川健次郎伝』(星亮一、平凡社、2003年)、『山川家の兄弟—浩と健次郎—』(中村彰彦、人物文庫、2005年)、『評伝山川健次郎—士君子の肖像』(大竹正容他編、山川健次郎顕彰会、2013年)などがある。
- 7 『東大総長山川健次郎の目指すべき国家像と未来』(早川廣中・木下健、長崎出版、2011年)。著者のひとりである木下氏(東京大学工学部教授)は健次郎の曾孫(健次郎の三女照子の孫)にあたる。
- 8 『山川健次郎日記 印刷原稿第一~第三、第十五』(尚友倶楽部編、芙蓉書房出版、2014年)。平成24年(2012)に秋田県公文書館に日記の写本の一部所蔵が確認され、小宮京氏・中澤俊輔氏により翻刻、報告された。
- 9 平成30年(2018)1月22日、第196回国会の安倍晋三首相による施政方針演説の冒頭は「150年前、明治という時代が始まったその瞬間を山川健次郎は政府軍と戦う白虎隊の一員として迎えました。しかし、明治政府は国の未来のために彼の能力を活かし、活躍のチャンスを開きました」であった。

る人物である。『男爵山川先生傳』にある遺族紹介には「長男洵氏は東京帝国大学農学部を出で、水産講習所の教授となり、更に東京帝国大学農学部教授をも兼任せられ、其間農学博士の学位を授けられ、屢々新研究を発表して学会の為に尽瘁して居られる我国水産学の権威である。」(花見編 1939: 476) とのみ記される。

本論文は、健次郎の長男洵がどのような研究をし人生を送ったのか、その功績についての報告である。残念ながら日記のような史料は存在しなかったが、孫の三木邦夫氏¹⁰及び親族の鶴沢佳子氏より聞き取りを行い、洵が認めた研究論文、報告書、各雑誌への寄稿などを調査した。山川健次郎の跡を継いだ¹¹長男洵の人物像を明らかにし、上京した旧会津藩士の一族が明治期以降をどのように過ごしたのか、その足跡を辿る(登場人物については次頁の家系図を参照されたい)。なお、本稿中、物故者の敬称は省略し、引用文の字体は概ね現行の印刷文字に改め、仮名遣いは原文のままとした。

2. 少年時代の洵について

山川健次郎は、明治14年(1881)に唐津藩士丹羽新の次女^{りゅう} 柳(1865~1916年)と結婚した。結婚当時、東京帝国大学理学部教授嘱託であった健次郎は28歳、柳は17歳であった。柳は、のちに宮内省御用掛(昭憲皇太后のフランス語の通訳)となった健次郎三姉の操に見出されたようで、たつての望みで山川家に迎えられた。結婚当初は長兄浩らと同居し¹²、当時の山川家には健次郎の母艶(1817~1889年)¹³や姉たち¹⁴もいた(東 1986: 86)。



写真1 明治32年(1899)12月17日の山川家
左から佐代子(次女)、照子(三女)、柳、洵(長男)、健次郎、憲(三男)、建(四男)(国立国会図書館所蔵『吾亦紅』口絵より転載)

健次郎夫妻には7人の子ども(4男3女)が生まれたが、成長したのは5人であった。明治16年(1883)に生まれた洵が長男で、続く次男^{やすし} 彦(生年1884年)、長女艶(生年1886年)は早世し、次女佐代子(1888~1967年)、三男^{ただす} 憲(1890~?年)、四男^{たける} 建(1892~1944年)、三女照子(1898~1990年)に恵まれた。(写真1)

10 昭和23年(1948)東京都生まれ。洵の三女教子氏(中央大学教授の三木忠夫夫人)の長男である。令和元年(2019)6月18日、10月26日練馬にて聞き取りを行った。

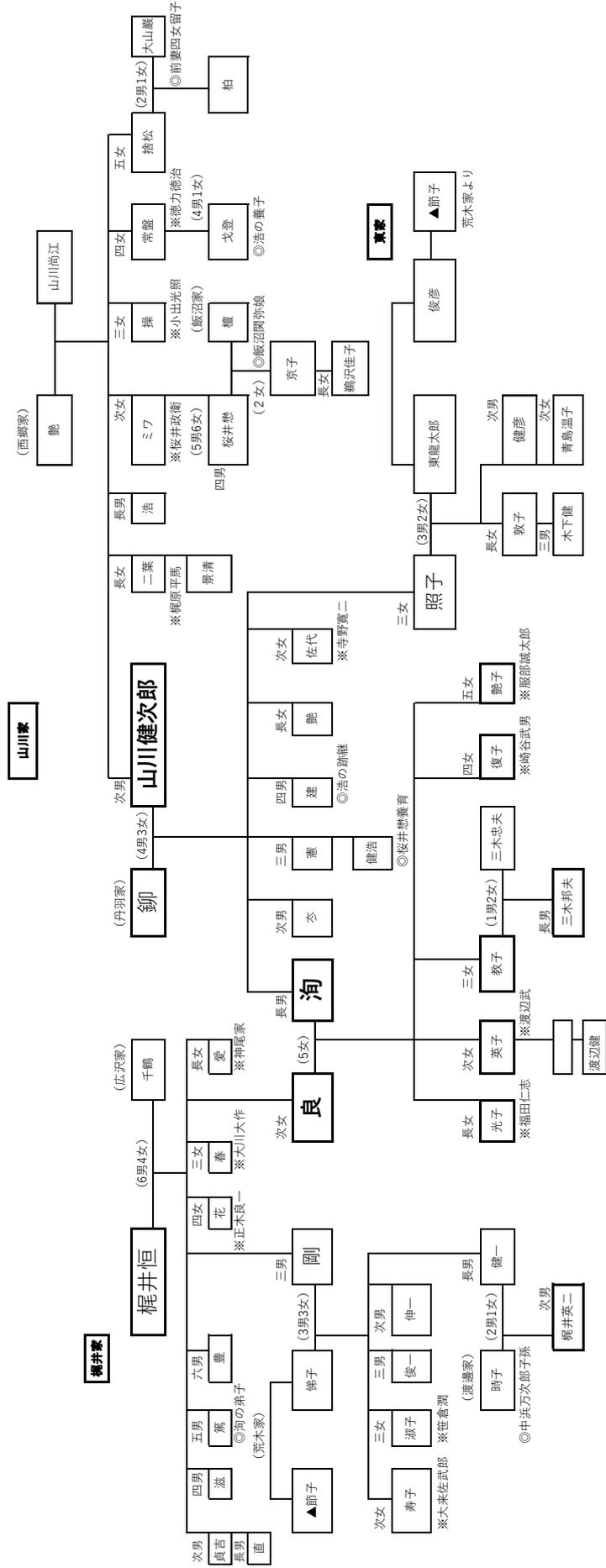
11 幕末の山川家本家は、7人兄弟の長男浩が家督を継いだ。浩は戊辰戦争で家老職を拝命、会津開城後、明治3年(1870)斗南藩(下北半島付近に移封)として再興となると藩の大参事を務めた。廃藩置県後は陸軍に出仕し、陸軍少将となった。明治31年(1898)1月26日に佐賀の乱・西南戦争の功績により、山川家は男爵家となった。次男である健次郎は結婚により分家したが、大正4年(1915)12月1日に多年の功により、同じく男爵家となった。

12 いつからか定かではないが、東京の浩郎は牛込区若松町(現新宿区)にあった。

13 会津藩士西郷近登之の長女で、同藩士山川尚江重固(1200石)に20歳で嫁いだ。12人の子に恵まれたが、成長したのは7人であった。尚江は万延元年(1860)に死去、末子の咲子(捨松)はまだ生後2か月であった。艶は剃髪し勝誓院と号した。「唐衣」という歌号でも知られる。

14 長女二葉(会津藩家老梶原平馬に嫁いだが離別、一人息子景清がいる)、三女操(会津藩士小出光照に嫁いだが、小出は佐賀の乱で戦死)である。明治14年(1881)当時、すでに次女ミワは桜井政衛、四女常盤は徳力(のち山川)徳治に嫁いでおり、五女捨松はアメリカ留学中であった。のち、二葉は小石川区久堅町(現文京区)、操は小石川区西江戸川町を経て小石川区同心町(現文京区)にそれぞれ屋敷を持ったと思われる。

関係家系図



(著者作成) 榊沢佳子氏, 梶井英二氏, 三木邦夫氏より聞き取りの聞き取りより ◆主に本論文に登場する人物を中心に家系図を作成した。※は嫁ぎ先, ◎は備考, ▲は同一人物。

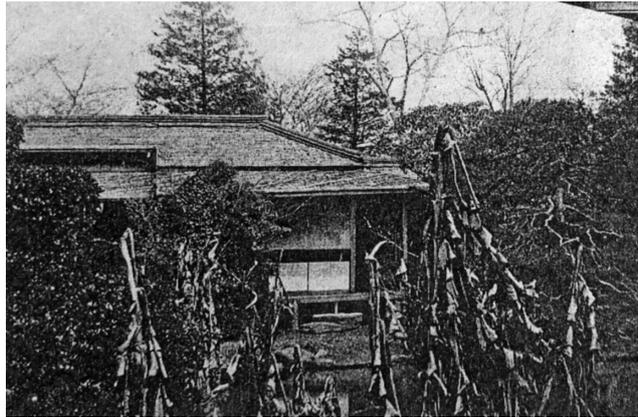


写真2 初音町の山川邸（明治30年代）

左：表玄関，右：庭（国立国会図書館所蔵『吾亦紅』口絵より転載）

照子は、回想録『吾亦紅』^{われもこう}（1986年刊）¹⁵を著しており、山川家の日常が鮮明に描かれている。これによると、健次郎は明治22年（1889）頃、伝通院から程近い初音町（現文京区小石川）の旗本屋敷¹⁶を千円で購入した。（写真2）

同書によると、屋敷は約2千坪あり、土蔵3戸、500坪の池、池の背後には山があり桜の木が何本もあった。会津から上京する書生たちのために大きい屋敷を求めたとあり、間数は21あった。健次郎が屋敷の一番奥まった上段の間（床の間、違い棚つきの10畳）に控え、鉦の部屋、子ども部屋（洵は10畳と4畳半の2間ある2階を次女佐代子と共有、年齢が下の兄弟たちは1階）、書生部屋、女中部屋、20畳もの台所があった。池には島があり幾つも橋がかかっていた。池の水を調節する水門があり、少しづつ流れを門外に出していた。流れは小川になっており、裏庭には茶臼や丹波栗、胡桃の木があり、その収穫を楽しむ生活であった（東1986：94～106）。

照子は、屋敷の様子を「両親、私たち兄弟五人、常住五人の書生、爺やと婆や、若い女中三人、それに絶えず訪れる親類、同郷人などの出入りも多い」（東1986：108）と書き残している。書生のなかには、10年間居座ったものもいた¹⁷。

洵の少年時代の父健次郎は、明治19年（1886）に33歳で東京帝国大学理科大学教授となり、明治21年（1888）に理学博士号を授与され、明治34年（1901）6月、48歳で東京帝国大学総長に就任した（洵は18歳）。明治37年（1904）8月には貴族院議員に勅選されている。翌年12月に東京帝国大学総長を退いた¹⁸が、明治40年（1907）6月には明治専門学校（現九州工業大学）総裁を経て、明治44年（1911）に九州帝国大学総長に就任した（花見編1939：1～9）。洵が物心ついたときより、父は明治の教

15 『吾亦紅』（私家版）は、雑誌『老壯の友』『会津会報』などへ投稿した照子の随筆を一冊にまとめた回想録である。照子は、大正8年（1919）4月に東龍太郎（1893～1983年）に嫁ぎ、3男2女に恵まれた。東は東京帝国大学医学部を卒業し、同大学教授に就任した。スポーツ医学の先駆けで、日本オリンピック委員長やIOC委員を歴任、昭和34年（1959）～昭和42年（1967）まで東京都知事を務めている。回想録には大阪船場の薬種業を営む東家、それも10人兄弟の長男の嫁となった照子の奮闘ぶり、アメリカ旅日記、日本各地への旅行記などが収載され、貴重な史料である。

16 高家衆の六角家（六角越前守）の屋敷である。千代田城柳の間出仕、2千石の家柄であった。

17 鉦の知らない間に下宿から蒲団を肩に担いで来て書生の一員になったものもいた。10年間居座った湯田和平（湯田玉水、1879～1929年）は、帝展無鑑査の南画の大家となった（東1986：111）。

18 日露戦争開戦前、明治36年（1903）に政府の軟弱外交に対して強硬外交を主張する東京帝国大学法科大学教授を中心とする7人の博士が政府に意見書を提出した、いわゆる「七博士事件」の一連の責任をとって辞職した。

育界を牽引する重要な職務を担っていた。

このような家庭環境で育った洵は、本人が書いた「履歴書」¹⁹には、明治41年(1908)7月、東京帝国大学農科大学を卒業し、同月大学院に進学したとあるが、大学入学以前の学歴が記されていない。そこで旧制第一高等学校から第七高等学校の卒業生名簿にあたったところ、第六高等学校(岡山)の第3期卒業生・二部農科の名簿に「山川洵、東京府平民」(第六高等学校編1913:230)が見えた。明治38年(1905)7月3日卒業とある。高等学校卒業年と大学卒業年が修業年数と合っているので、洵のことと思われる。事実なら、洵は岡山で高等学校時代を過ごしたことになる。この年の卒業生は160名、農科は8名であった。

洵の末弟建²⁰と同じく各旧制高等学校の名簿で探すと、大正4年(1915)7月の第七高等学校(鹿児島)の第一部英法科卒業生のなかに名前があった(第七高等学校造士館編1915:203)。健次郎の教育方針であったのか、多くの書生の面倒をみる一方で、息子たちには親元を離れた学生生活を送らせていた。また、洵が高等学校を卒業した年を生年より数えると23歳、大学を卒業した年は26歳であった。

ちなみに、妹の照子は、東京女子高等師範学校附属幼稚園から同校小学校、同校高等女学校へ進学し、健次郎の転勤にも同行し福岡高等女学校への転校を経て²¹、大正6年(1917)に東京女子高等師範学校附属高等女学校を卒業した(東1986:379)。また、次弟憲²²については、各高等学校の卒業生名簿から見つけることができなかった。

3. 就職と結婚、留学へ

洵が大学を卒業した明治41年(1908)、山川家は初音町から池袋(豊島郡巣鴨村大字池袋100番地)に引っ越した。照子の回想録によると、新築した屋敷で、当時は野中の一軒家、場所は巣鴨監獄の近くにあった。健次郎が耐震、採光、通風を充分考えて設計し、冷房がない時代、ものが吹き飛ぶほど風通しのよい構造²³であった(東1986:142)。

19 洵は、昭和13年(1938)度の東方文化事業の一環として外務省に「大陸魚類ノ化学的研究事業助成」を申請しており、本人が提出した履歴書が残されていた。事業は大陸産魚類(主に満洲、支那方面)の化学的研究のための文化事業特別会計事業費として許可され、8千円が交付された(外務省外交史料館所蔵、戦前期外務省記録)。

20 建は、高等学校在学中である大正2年(1913)に山川家の本家(健次郎兄浩の一族)の養子となり家督を相続した。大正7年(1918)に東京帝国大学法科大学を卒業、その後高等文官となり、千葉県警視理事官、静岡県地方事務官、文部事務官兼文部書記官、普通学務局事務課長、文部省社会教育局長、専門学務局長などを歴任し(人事興信所編1928:ヤ68)、貴族院議員にも勅選された。妻綾子は東京出身の高杉晋の次女で、東京府立高等女学校卒業、3男に恵まれた。

21 健次郎が明治44年(1911)4月より九州帝国大学総長に就任したのに伴い、同年9月に福岡に引っ越し、大正2年(1913)3月に東京に戻った。数年での転勤となった理由は以下である。明治44年(1911)11月、天皇のお召列車が入れ替えの作業中脱線した。明治天皇は乗っていなかったが、出発が遅れたことで門司駅職員が自殺する。天皇は遺族へ恩賜金を下賜し、玄洋社が「職員の一死を永久に記念する」として建碑の寄付を呼びかけた。これについて、健次郎は自殺を賛成できず建碑計画に反対との意見を福岡日日新聞に発表した。この発言が天皇への不敬であるとの運動が広がり、衆議院で山川問題として文部大臣が追及されるなど事態は深刻化していった。そのため、九州帝国大学総長から東京帝国大学総長への転任で終息させた(九州大学編2011:25)。

22 憲について、健次郎の死後すぐに編まれた『男爵山川先生傳』には「満洲に奉職せられ」(花見編1939:476)とあり、『人事興信録』などにも「分家した」程度の記録しかない。いつ頃か定かではないが、憲は鈴音(山川家では若子と呼ばれた)という女性と結婚した。鈴音は産後の肥立ちが悪く死去し、その時に生まれた長男健浩は、洵の妻良が養育していたが、4歳になった昭和2年(1927)に憲の従兄にあたる桜井懋(健次郎二姉ミワの四男)が引き取って育てた(桜井1968)。憲は東京大空襲の混乱に行方不明となったと桜井家には伝わっている(ミワの曾孫・鶴沢佳子氏(昭和21年満洲生まれ)よりの聞き取りより)。桜井家には、昭和30年代と思われる健浩の結婚式の写真が残っている。

23 御の従姉秀(1863~?年)の夫は、建築家・辰野金吾(1854~1919年、唐津出身)である。金吾は健次郎の同僚であり、総二階であった池袋の屋敷の設計をおかしいと進言したというのが、形がよい家より住みやすく衛生的な家がいいと退けている(東1986:143)。

表1 「山川洵の履歴書」

西暦	年 月 日	経 歴	所 属
1909	明治 42 年 3 月 24 日	入営ノ為大学院退学	
1910	明治 43 年 3 月 31 日	水産講習所科学及製造ニ関スル試験事項ヲ囑託ス	農商務省
	10 月 26 日	任水産講習所技師 叙高等官七等	内 閣
1914	大正 3 年 7 月 22 日	水産講習所在外研究生ヲ命ズ	農商務省
1916	大正 5 年 5 月 16 日	北亜米利加合衆国へ向ケ出発	
	(大正 5 年 9 月～ 大正 6 年 8 月)	エール大学シェフィールドサイエンティフィック・スクール ニ於テ科学ヲ研究ス	
1917	(大正 6 年 9 月～ 大正 9 年 6 月)	ロックフェーラー研究所ニ於テ科学ヲ研究ス	
1920	大正 9 年 7 月 4 日	帰朝	
1921	大正 10 年 2 月 3 日	任水産講習所教授 叙高等官五等	内 閣
	10 月 24 日	東京帝国大学農学部講師ヲ囑託ス	東京帝国大学
1922	大正 11 年 5 月 4 日	農学博士 (第 22 号) 授与	東京帝国大学
1923	大正 12 年 12 月 28 日	兼任東京帝国大学教授 叙高等官四等	内 閣
		農学部勤務ヲ命ズ	文部省
		水産化学講座兼任ヲ命ズ	文部省

(出典) 「大陸魚類ノ化学的研究事業助成」(外務省外交史料館所蔵) より筆者作成

当時 12 歳の照子は、監獄の近くで気持ちのよいことではなかったというが、新築の木の香、畳の美しい色、広い長い廊下、ランプに代わるガス灯のあざやかな青白い輝きに感動を覚え、新しい家がめずらしくてたのしかったと記している。家の間数の記述はないが、女中部屋でも 18 畳、2000 坪の庭に、テニスコートまであった(東 1986: 135~150)。池袋の屋敷には、相変わらず 4~5 人の書生と女中 3 人、婆や、爺やがいた。屋敷や書生などの詳細は拙稿(遠藤 2020: 42)を参照されたい。

表 1 は「履歴書」に書かれている洵の経歴である。東京帝国大学大学院へ進学した洵であったが、明治 42 年(1909) 3 月 24 日には入営のため大学院を退学した。兵役は学生に不利益という意見があるなか、健次郎は尚武主義であり「兵役に関しては之を最も厳粛にして苟も男子たるものゝ必ず服務しなければならないもの」(花見編 1939: 480)という考えで、洵について「一年志願兵として体格検査の結果、近視眼の為め一旦不合格に決定したのであるが、先生は検査官に強いて再検査を要請し、遂に目出度く工兵に合格と決定したのであった」(花見編 1939: 480)。洵は、一年志願兵として陸軍に士官し、陸軍工兵少尉となった。

兵役を終えると、明治 43 年(1910) 3 月に水産講習所に奉職した(所在地は深川区越中島)。その後、大正 3 年(1914) 7 月「水産講習所在外研究生ヲ命ズ」とある。外務省外交史料館所蔵の『文部省留學生関係雑件』には、「水産講習所技師山川洵独逸留学ノ件」が公文書として残されていたが、本文が添付されていないため留学の詳細は不明である²⁴。また、大正 5 年(1916) より 4 年間渡米し、イ

24 ちなみに、同資料館所蔵の『農商務省留學生関係雑件』には「水産講習所研究生山川洵監督方依頼ノ件」が残っていた。大正 3 年 7 月 22 日付で農商務大臣大浦兼武が外務大臣加藤高明に宛て、ドイツへの渡航中、日本の特命全権大使に洵の監督方を依頼する内容である。

ェール大学²⁵に加え、ロックフェラー研究所にて研究活動をしたことが今回の調査で分かった。

この間、洵は結婚をした。明治44年(1911)3月のことであった。妻は、大聖寺藩(現石川県加賀市)出身の陸軍軍医梶井恒^{ひさし}(1848~1923年)の次女良^{よし}(1891~1972年)である。軍医の父に従い、日本各地を転々とする少女時代を送った良は、東京府立第二高等女学校²⁶を卒業している(帝国秘密探偵社編1930:49)。良の生家である梶井家のことや二人が結婚に至った理由などについては、拙稿(遠藤2020)にて報告した。

新婚の二人は池袋の屋敷で過ごしたが、結婚の半年後には健次郎や柳、照子たちは福岡に引っ越したので、2年ほど、広い屋敷に新婚夫婦だけ(と、書生など)の時期があった。洵と良には長女光子^{みつこ}(大正元年(1912)生)が誕生し、続いて、次女英子^{ふさこ}(大正3年(1914)生)、三女教子^{のりこ}(大正10年(1921)生)、四女復子^{なほこ}(大正12年(1923)生)、五女艶子^{つやこ}(大正15年(1926)生)に恵まれた²⁷。

4. 水産学者として

昭和元年(1926)発行の『実業之日本』に「親も子も大学教授」と題する記事が載っている。

「親の山川健次郎が理学博士で、子の山川洵が農学博士、共に御立派なお揃ひであるとはいはねばならぬ。前者は前東京帝国大学総長で、同名誉大学教授で、現任枢密顧問官で、従二位勲一等の男爵様だ。後者は水産講習所並に東大農学部の教授で、正五位勲^マ何等の御曹司で、農芸化学の専攻家として斯界に知られて居る。」(大日本実業学会1926:39)とあり、親子で同じ博士で職名にある珍しさを讃えられた。(写真3, 写真4)



写真3 山川健次郎胸像
(東京大学理学部前, 2019年11月筆者撮影)



写真4 山川洵
(『東京大学農学部水産学科の五十年』53頁より転載)

洵は、どのような研究をしていたか。明治42年(1909)1月、「魚肉の窒素化合物に就て」が『東京化学會誌』に掲載された。魚肉の成分分析の論文で、27歳の洵と9歳上の鈴木梅太郎²⁸との共著であった。発行年月から、この直後入営したと思われる。洵の研究について、令和元年(2019)年12月末までに筆者が収集できた学術論文や報告書を表2にまとめる。

収集できた資料は、ほとんどが所属先の『水産講習所試験報告』に掲載された論文である。これによると、大正元年(1912)から留学前の大正3年(1914)までは、番号2, 4~12のように、「鰹節」に関する研究、主に鰹節の製造中の化学変化について分析していたことが分かる。『水産講習所試

25 健次郎の玄孫にあたるタケシ・ワタナベ(渡辺健, 1975年生, 洵の次女英子の孫, イェール大学卒業, コネチカット・カレッジ助教授(日本文学))がイェール大学資料室で健次郎の痕跡を調査したところ、健次郎が同大学からの名誉博士号授与を断る1909年の手紙と、洵が同大学に留学する際の手紙があった(渡辺2014:40)という。

26 現東京都立竹早高等学校, 所在地は文京区小石川である。

27 5女全員が女子学習院に通った。

28 1874~1943年。静岡出身で、当時東京帝国大学農科大学教授であった。ビタミンを発見したことで知られる。鈴木²⁸のビタミンに関する研究(成分の化学抽出)は、明治43年(1910)頃からといわれる。大正6年(1917)に理化学研究所を設立させた。妻の須磨子は辰野金吾の娘で、梅太郎の結婚は健次郎が仲人を務めている。

表2 山川洵の水産学に関する学術論文, 研究報告, 実習の動向

番号	発行年	題 目	投稿雑誌・掲載書名	備 考
1	明治42年(1909)1月	「魚肉の窒素化合物に就て」	『東京化学会誌』30巻1号	鈴木梅太郎との共著
2	大正元年(1912)	「鯉節の成分」	『大日本水産会報』362号	筆者紹介は「水産講習所技師」
3	大正2年(1913)3月	「鮑中ノ硫黄化合物ニ就テ」	『水産講習所試験報告』第8巻第10冊	山本祥吉との共著
4	大正2年(1913)3月	「鯉節研究 鯉節製造中ニ於ケル化学変化ニ就テ」第1報	『水産講習所試験報告』第8巻第10冊	山本祥吉との共著
5	大正2年(1913)3月	「鯉節研究 鯉節製造中ニ於ケル化学変化ニ就テ」第2報	『水産講習所試験報告』第8巻第10冊	山本祥吉との共著
6	大正3年(1913)12月	「鯉節研究第4回 鯉節製造中ニ於ケル化学変化ニ就テ」第3報	『水産講習所試験報告』第10巻第3冊	山本祥吉, 関根豊との共著
7	大正3年(1913)12月	「鯉節研究第5回 鯉節製造中ニ於ケル化学変化ニ就テ」第4報「黴種ト成分トノ関係」	『水産講習所試験報告』第10巻第3冊	山本祥吉, 関根豊との共著
8	大正3年(1913)12月	「鯉節研究第6回 異ナリタル製造法ノ鯉節ノ成分ニ及ボス影響ニ就テ」第1報「普通法, 火乾法及ビ湿乾法」	『水産講習所試験報告』第10巻第3冊	山本祥吉, 関根豊との共著
9	大正3年(1913)12月	「鯉節研究第7回 鯉節ノ品等ト其成分トノ関係第1報」	『水産講習所試験報告』第10巻第3冊	鈴木直辰との共著
10	大正3年(1913)12月	「鯉節研究第8回 鯉節並ニ他ノ節類中ニ於ケル成分量」	『水産講習所試験報告』第10巻第3冊	
11	大正3年(1913)12月	「鯉節研究第9回 鯉節製造中ニ於ケル化学変化ニ就テ第3報続報」	『水産講習所試験報告』第10巻第3冊	朝倉唯一との共著
12	大正3年(1913)12月	「鯉節研究第10回 鯉節ノ品等ト其成分トノ関係」第2報「大正博覧会出品節類ニ就テ」	『水産講習所試験報告』第10巻第3冊	山本祥吉, 関根豊, 朝倉唯一との共著
13	大正3年(1914)12月	「ヒスタミン」ニ就テ 第1報	『水産講習所試験報告』第10巻第3冊	関根豊との共著
14	大正3年(1914)12月	「海産動物ノ脳漿ニ就テ 第1報」	『水産講習所試験報告』第10巻第3冊	内田孝雄との共著
15	大正3年(1914)12月	「鯉節製造法ニ就テ茨城福島宮城岩手及青森ノ五縣出張報告」	『水産講習所試験報告』第10巻第3冊	
16	大正5年(1916)	「新シキプロタミンニ就テ」(英文)	『東京帝国大学農学部紀要』第5巻第4冊	
17	大正5年(1916)	「新シキプロタミンニ就テ」	『水産講習所試験報告』第12巻第1冊	山本祥吉・朝倉唯一との共著
18	大正11年(1922)	「イーストニユクレイック」酸ニ就テ」	『水産講習所試験報告』第17巻第3冊	
19	大正12年(1923)6月	第2回「プロタミン」ノ研究新シキ「プロタミン」ニ就テ(第2報)	『水産講習所試験報告』第19巻第1冊	野方不二雄との共著
20	大正12年(1923)6月	第2回「ニユクレイック」酸ノ研究「イーストニユクレイック」酸ニ就テ(第2報)	『水産講習所試験報告』第19巻第1冊	西村庄松との共著
21	大正12年(1923)8月	第3回「プロタミン」ノ研究 新シキ「プロタミン」ニ就キテ, 第3報	『水産講習所試験報告』第19巻第3冊	梶井篤・高橋和夫との共著
22	大正15年(1926)10月	第4回「プロタミン」ノ研究 2,3「プロタミン」ト「ヒスタミン」ニ就テ(第1報)	『水産講習所試験報告』第22巻第2冊	吉本満兵との共著
23	大正15年(1926)10月	第5回「プロタミン」ノ研究新シキ「プロタミン」ニ就テ(第4報)	『水産講習所試験報告』第22巻第2冊	野方不二雄との共著
24	大正15年(1926)10月	第1回水産動物ノ精子ノ科学的研究 魚類ノ白子ノ科学的研究(第1報)	『水産講習所試験報告』第22巻第2冊	美川秀信・富山哲夫との共著
25	大正15年(1926)10月	第2回水産動物精子ノ科学的研究 鯉粒子ノ「ニユクレイック」酸ニ就テ	『水産講習所試験報告』第22巻第2冊	伊藤偲との共著
26	大正15年(1926)10月	第3回水産動物ノ精子ノ科学的研究 大羽鱈ノ粒子ニ就テ(第1報)	『水産講習所試験報告』第22巻第2冊	井深文司との共著
27	大正15年(1926)10月	第4回水産動物ノ精子ノ科学的研究「バチ」ノ精子ニ就テ(第1報)	『水産講習所試験報告』第22巻第2冊	西村庄松・堀内又郎との共著
28	大正15年(1926)10月	第1回水産哺乳動物ノ科学的研究 鯨ノ副腎ニ於ケル Adrenalineニ就テ(第1報)	『水産講習所試験報告』第22巻第2冊	西村庄松との共著
29	大正15年(1926)10月	第2回水産哺乳動物ノ科学的研究 鯨肉蛋白ノ加水分解(第1報)	『水産講習所試験報告』第22巻第2冊	渋谷雄一郎との共著
30	大正15年(1926)10月	第3回水産哺乳動物ノ科学的研究 鯨ノ臍臓ニ就テ(第1報)	『水産講習所試験報告』第22巻第2冊	中村信友との共著
31	大正15年(1926)10月	第4回水産哺乳動物ノ科学的研究 鯨ノ内臓ニ就テ(第1報) 鯨ノ脾臓並ニ臍臓	『水産講習所試験報告』第22巻第2冊	八坂茂との共著
32	大正15年(1926)10月	第1回水産食料品ノ科学的研究 石灰及苦土ノ新陳代謝ニ就テ	『水産講習所試験報告』第22巻第2冊	
33	大正15年(1926)10月	第2回水産食料品ノ科学的研究 蝦蛄ノ蛋白質ニ就テ	『水産講習所試験報告』第22巻第2冊	伊藤偲との共著
34	昭和2年(1927)10月	第5回水産動物精子ノ科学的研究 精囊ノ加水分解(第3報)	『水産講習所試験報告』第22巻第4冊	西村庄松との共著
35	昭和2年(1927)10月	第3回水産食料品ノ科学的研究 鱈ノ肉蛋白ノ加水分解	『水産講習所試験報告』第22巻第4冊	渋谷雄一郎との共著
36	不 明	第8回「プロタミン」ノ研究「サルミン」ニ就テ(第3報)	水産学会大会	西沢丹三との共著
37	不 明	第9回「プロタミン」ノ研究鱈魚ト佃角鮫ト「プロタミン」	水産学会大会	新田忠雄・岩松三郎との共著
38	大正15年(1926)	「夏の三崎」	『動物学雑誌』38(455)	岡徹著による実習報告
39	昭和3年(1928)	「三崎雑報」	『動物学雑誌』40(480)	吉井樽雄著による実習報告
40	昭和14年(1939)	「満洲国及中華民国に於ける魚介の研究」	支那調査報告第2冊外務省文化事業部	

(出典) 収集資料より筆者作成

験報告』第10巻第3冊に至っては、洵は共著も含め10編の報告をしている。同冊の緒言によると、これまで製造試験部が化学に関する試験を行っていたが、大正3年(1914)3月に(化学的研究を専門に行う)化学試験部が新設されたことが記され、それ以降の研究成果が輯録されている。

番号15は、鰹節に関して、茨城県、福島県、宮城県、岩手県、青森県の沿岸を現地調査した報告であった。背景として、大正3年(1914)の大正博覧会にて日本各地より様々な鰹節が出品されたが、肉眼では変わらないのに、南方産の鰹節は東北産より良好成分が多いこと、特に静岡、高知産が優良品といわれ、東北産より何十倍も高額であることの現状から、鰹節製造法の一定の基準を見出し、産地による価格の高低をなくすため、まずは東北産の鰹節の製造法の現状を探るための調査であった。洵は、各県の水産試験場長、漁師、加工業者など24名(各県5名程度)への聞き取り調査(他に、介類(鮑、帆立等)の煮汁についての聞き取り調査を9名)を行い、鰹を沸騰させる温度、時間、沸騰後に入れる冷水の量、鰹の脂肪の量、乾燥の仕方などを報告した。その後、鰹節の成分の調査については、共著者である山本祥吉が生涯のテーマにしている²⁹。

大正5年(1916)には、新しいプロタミンの研究を開始している。プロタミン(Protamin)は、広辞苑(第3版)には「塩基性単純蛋白質の一種。魚類の精子の核などに多く含まれる」、大辞林には「塩基性タンパク質の一。比較的分子量で、水に溶け、構成アミノ酸としてアルギニンを多く含む。動物の精子核にDNAと強く結びついて核タンパク質の形で存在する」とある。巻頭の「緒言」は、以下のものであった(『水産講習所試験報告』第12巻第1冊)。

西暦一八九四年、エー、コッセル³⁰、ちやうざめヨリ初テ「スチウリン」ヲ分離セシ以来発見セラレタル「プロタミン」ハ僅ニ十餘種ニシテ其内本邦産魚類ヨリ得ラレタルハ只一種ニ過ギザリシガ本所ニ於テハ今回
さわら、ぶり、にべ、いしなぎ、すゞき 及ビむつ
ノ精液ヨリ六種ノ新シキ「プロタミン」ヲ分離シ「スコンプレミン」「セリオリン」「シェニン」「ステレオ
リン」「ラテオリン」及ビ「スコンプロピン」
ト命名シ各組成ヲ明ニシ且ツ生理作用ニ就キ聊カ研究セリ、依テ茲ニ其結果ヲ報告セントス

その後、「プロタミン」の研究は、ドイツ・アメリカへの留学を経て、大正15年(1926)10月に刊行された『水産講習所試験報告』第22巻第2冊の第4報まで続いた。この号について、掲載されている論文12編すべてに洵が関わっていた。各論文の内容は、「水産動物精子ノ科学的研究」「水産哺乳動物ノ科学的研究」「水産食料品ノ科学的研究」など多岐に亘る。留学を経験した洵にとって、更なる見識を深めての研究活動であったと思われる。

東京大学の沿革によると、水産学科は、明治43年(1910)に東京帝国大学農科大学に創設された。創設当時は、水産学第一、第二、第三、及び水産海洋学の4講座の構成(講座はいずれも明治40年(1907)4月新設)であった。水産学第三は町田咲吉教授³¹が水産製造、水質論を担当しており、性格上、

29 1886~1976年。広島出身で、明治40年(1907)に水産講習所へ入学し、明治44年(1911)に助手となり、大正14年(1925)に教授に昇格した。影山論文によると、専門は「調味学」であり、昭和10年代より、南洋諸島の鰹・鮪の肉質、鰹節改良に関する調査を行った。また、発売当時、粗悪品であった化学調味料「味の素」の改良にも尽力している(影山1996)。

30 アルブレヒト・コッセル(Albrecht Kossel, 1853~1927年)はドイツの医学博士。1910年に「核酸物質を含むタンパク質に関する研究による細胞化学の知見への寄与」でノーベル生理学・医学賞を受賞した。

31 1870~1931年。鹿児島出身で、農事試験場技師、統監府勸業模範場技師統監府技師を経て、東京帝国大学教授に就任、同大農学部長も勤めた。

水産化学教室とも称されていた。しかし、大正12年(1923)に、より基礎的な研究を指向して、水産学第三とは別に、水産化学講座が増設された(東京大学百年史編集委員会編1987: 929~945)。この新設講座の担任を、当時水産講習所教授であった洵が命ぜられ、水産講習所と兼任で東京帝国大学農科大学の水産化学講座を担当することになった。(表1)

すなわち、洵は2つの研究室に在籍し、多くの同僚、後輩が存在し、共同研究者(共著者)も複数人いたことになる。そのなかで、番号21の論文の共著者「梶井篤」は妻良の弟で、明治31年(1898)生まれである(遠藤2020: 40)。義弟が同じ研究室にいた事実と、15歳年下の研究者との共著であったことが分かる。親類の面倒をみながら³²、後進の育成も担っていたことが推察される。

大正11年(1922)に改造社社長山本実彦が中心となり、東京帝国大学と帝国学士院を巻き込んで、アインシュタイン(Albert Einstein, 1879~1955年)の来日を実現させた。10月8日にマルセイユを日本郵船「北野丸」で出港し、11月17日に神戸港に入港、途中の12日夜、香港で「光量子仮説」に対して贈られたノーベル物理学賞の電報を受け取っている(田賀井2006)。

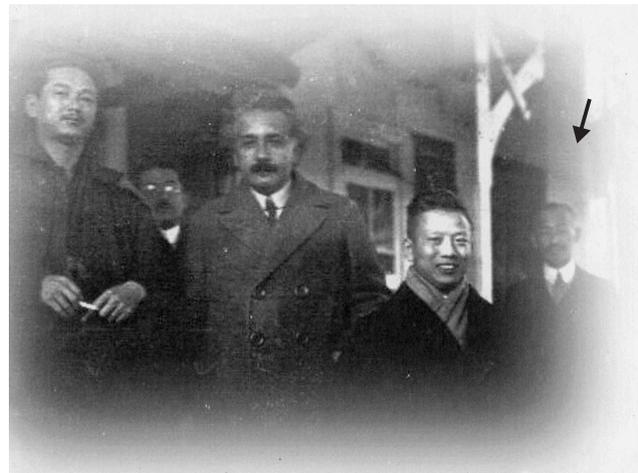


写真5 東京駅のアインシュタイン
右端が洵(「時空のデザイン」展図録より)

記録によると、アインシュタインは11月19日から12月29日まで43日の滞在の間、一般講演会を8回³³、東京帝国大学理学部物理学教室中央講堂での特別講義を6回行っている(田賀井2006)。この間、東京駅でアインシュタインと一緒に写真に写る洵の姿が残っている。(写真5)

この写真は、平成18年(2006)、東京大学総合研究博物館で開催された「時空のデザイン」展にて展示されたもので、キャプションには「三木教子氏提供」とあった。教子氏は洵の三女である。教子氏は平成18年(2006)前後に山川家に関する資料を整理しており(遠藤2020: 45)、その一連の作業のなかで、遺族によりこの写真が物理学者に配布されたようである³⁴。現在の三木家には写真が残っていない。「時空のデザイン」展での展示写真のキャプションでは各人物の説明はされなかったが、

32 海軍省の公文書(防衛省防衛研究所所蔵、「傍観関係 大礼特別観艦式陪観希望者の件(10)」)に、昭和3年(1928)12月4日の大礼特別観艦式について、観艦式事務委員長に宛てて観艦式を陪観したいという旨の洵の手紙(10月2日付)が残っているが、同書類の観艦式大臣招待者には当時陸軍省医務局一等軍医正であった「梶井貞吉」の名前が見つけられた。貞吉は洵の妻良の兄であり、義兄弟との繋がりが伺える。

33 一般講演会は、慶應義塾大学中央講堂(11月19日)、神田青年館(11月24日)、仙台公会堂(12月3日)、名古屋国技館(12月8日)、京都市公会堂(12月10日)、大阪中央公会堂(12月11日)、神戸基督教青年会館(12月13日)、福岡市大博劇場(12月24日)で開催された。演目は「一般並に特殊相対性原理について」「相対性原理について」等であった。その他、東京大学、東京商科大学、早稲田大学、東都大学、東京工業専門学校、東北大学、京都大学での学生歓迎会を開催した(田賀井2006)。日本の学術機関を横断する大イベントであったことが分かる。

34 平成18年(2006)3月30日に山田直氏(洵の四女復子の娘迪子の夫、当時九州大学ロンドン事務局長)が星亮一氏(歴史作家)へ送った手紙による。手紙には、この写真だけではなく「山川家は洵が東京駅プラットフォームで撮影した1等車両より顔を出しているアインシュタインの写真も所蔵していた。アインシュタインの写真にはガラスの乾版もついており、山川家が個人的に撮った写真で、今まで世間に知られていない写真のようで、何人かの物理関係者の方々に送った」とあった。

当時の日本が熱狂した世界的な物理学者の来日時に、洵も一刻行動を共にしたことが写真から分かる。

翌大正 12 年（1923）9 月の関東大震災は水産講習所を直撃した。木造校舎は損壊、図書 2 万冊、標本、諸機械、諸器具の大半を失い、わずかに残ったものはコンクリート造の化学試験部、海洋調査部、冷蔵施設、実習船「雲鷹丸」、海洋調査部所属の「天鷗丸」だけであった。当時の水産講習所は講習部と試験部があり、学生数は 300 人程度であったが、教授、助教授、技師、技手などを入れるとかなりの大所帯であったようで、地震後はしばらくバラックの仮校舎で過ごした（影山 1996: 146）という。

続いて、表 2 に記した番号 38・39 の報告には、三崎（東京帝国大学三崎臨海実験所）での洵の実習の様子が記してあった。番号 38 には、大正 15 年（1926）6 月下旬の記録として、「農学部山川洵教授一行の *Dolabella*, *Aplysia* の色素採集の為来場」（岡 1926: 322）とある。*Dolabella* とはツツナミガイ、*Aplysia* とはウミウシのことである。

同年 7 月中旬の記録には「農学部教授山川洵教授一行の *Dolabella*, *Styela plicata* 採集のため来場あり、大量なる採集振りには流石の熊さんもこぼして居た。」（岡 1926: 322）とあった。*Styela plicata* とはホヤの一種である。「熊さん」の本名が分からないが、大量に採集していったとのことで、実習の活気が感じられる。

表 2 の番号 39 は昭和 3 年（1928）の実習の記録である。洵は、5 月末に実習生 5 人を引き連れ、「*aplysia* 狩り」、9 月 13 日から 8 人を引き連れ「近所の *Dorabella* 狩りを一週間ぶつつづける」（吉井 1928: 430）とあった。

三崎の記事には、京都帝国大学動物学教室、新潟医科大学の解剖の教授、発光動物研究者、海産動物腸内菌研究者など多くの来場者が記録されている。彼らと交わりながら、洵はツツナミガイ、ウミウシ、ホヤなどを採集した。残念ながら、採集した生物の研究結果についての論文は収集に至らなかった。研究活動の一環であったか、学生の教育活動のための採集であったのか不明である。いずれにしても、学生と寝食を共にする野外実習をこなしていた。ちなみに、この頃の洵は日本農芸化学会³⁵の副会長に就任していた（昭和 3 年（1928）4 月～昭和 5 年（1930）3 月まで）。（写真 6）



写真 6 水産学科卒業生送別会（昭和 3 年）

後列左より八人目、帽子をかぶり、眼鏡をかけているのが洵（国立国会図書館所蔵『東京大学百年史』口絵より転載）

35 大正 13 年（1924）設立。初代会長は鈴木梅太郎。学会によれば、農芸化学は生命・食糧・環境の 3 つのキーワードに代表されるような「化学と生物」に関連した事柄を基礎から応用まで幅広く研究する学問分野と説明される。

弟子の麓禎康³⁶による回想によると、洵は水産講習所の教授が本職で、東京帝国大学は兼任であり、大学には週2回勤務していた。麓が兵役から研究室に戻ると、洵からかつての自身と同じように医学部で薬理学の聴講と実習をするように命じられた（紫水会編1960：53）と述べており、洵もまた他分野へ精通していたのが分かる。また、洵が二つの研究室を持っていたことと、講習所の豊富な予算を使えたことは、弟子の麓たちにも有難かったようで、昭和10年（1935）夏には、醒ヶ井（滋賀県）にてマスの飼育試験を行い、魚類の養殖でビタミンを取り上げた研究を行ったとある。また、プロタミン・ヒストンの調査の延長としてソテツの花粉採集と生育地視察が目的で沖縄・奄美大島にも同行している（紫水会編1960：56）。

調査に出発するときの逸話として、「先生は列車が出る一時間以上前から東京駅に来られるので、お供の方が遅れて恥をかいた。」がある。調査中は「潔癖な先生は宿は一流の家を選ばれた」らしいが、列車は三等であった。東京駅を発ち、品川駅を通過する頃にはビールが目の前に置かれ、弟子には絵葉書代まで清算してくれた（紫水会編1960：55）との思い出が残る。麓によると、洵の遺稿は後輩の新田忠雄がまとめた。『水産學會報』9巻（昭和19年（1944）10月刊）所収の「大陸産淡水魚に就て」がそれで、洵は、大陸で採集した魚類の栄養価値の報告を、病床中、死の数日前まで整理していたという。

5. 満洲への関心

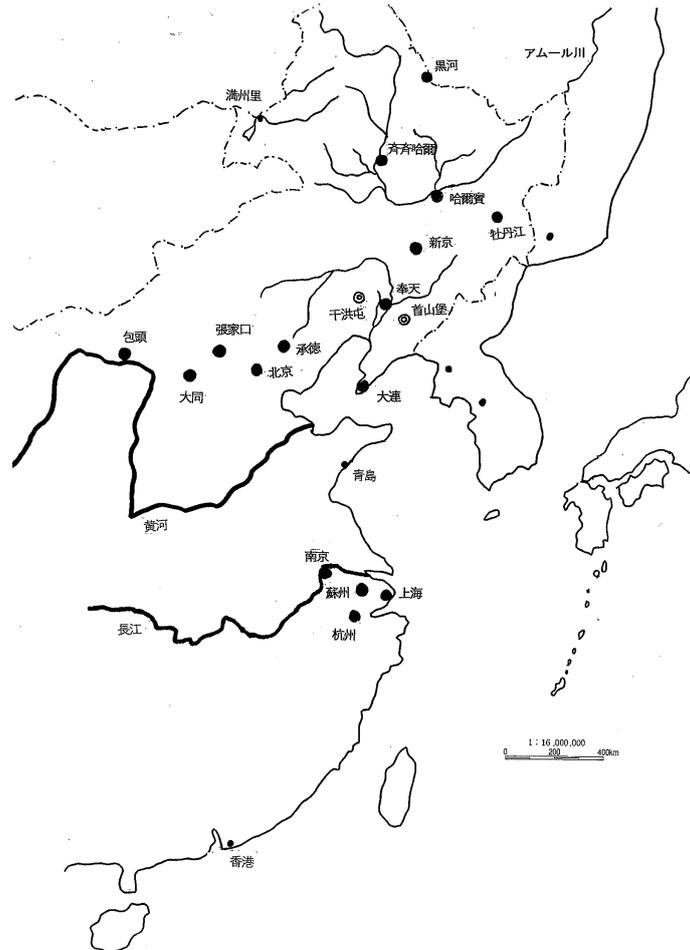
表2の番号40は、外務省文化事業部助成の下に「支那及び満洲における淡水産魚介調査」のため、2回に亘り、中国とその東北部方面に赴いて現地調査をした調査報告書³⁷である。序文には「邦人の嗜好に適する魚介の種類及其の漁獲、加工法並大量供給に適する養殖法其他に関する現地調査の結果を記述し、支那及満洲における魚介利用に関する有益な資料」（山川1939：1）とあった。

第1回は、昭和13年（1938）4月14日～5月12日に、東京から長崎を経由し、上海・鎮江・南京・蘇州・杭州を調査し、第2回は同年6月9日～8月5日に、東京から朝鮮を経由し、奉天・新京（=長春）・哈爾濱、松花江を下航し、佳木斯・牡丹江・黒河・齊齊哈爾の魚市場を調査、哈爾濱を経て、新京、奉天へ戻り、承德・北京・張家口・大同・包頭で黄河の魚行商人に調査し、北京を経由し、天津から帰国の途に着いた（山川1939）。旅行経過や調査概要には、水系から漁獲方法、加工法、貯蔵法、養殖法、その他として冷凍方法や製水事業、寄生虫などについても報告しており、写真も添付され、実に詳細な記録であった。（参考地図）

ところで、洵はこれ以前にも満洲に足を運んでいる。それは、昭和5年（1930）5月の『偕行社記事』³⁸に掲載された「干洪屯の戦跡を訪ねて」への寄稿文から分かる。冒頭には、水産講習所の堀井富太郎による人物紹介がある。「御承知でもありませうが氏は山川健次郎男〔爵〕の令息にて其学識

36 麓もまた学術論文を著しており、1960～1970年代は神戸大学教育学部の所属として『日本水産学会誌』31巻7号（1965年）、38巻7号（1972年）などに、1980年代は市邨学園大学（現名古屋経済大学）の『自然科学研究会会誌』に多くの投稿がみられる。

37 昭和14年（1939）に調査報告書が刊行した。同年2月の公文書「満洲ニ於ケル魚介ノ研究刊行ノ件」（外務省外交史料館所蔵）には、調査報告書の配布先についての記録があった。発信者（資料作成者）は当時の文化事業部長（三谷某）であり、配布先のリストには「文部省専門学務局対支文化事業調査会委員 男爵山川建」が含まれており（誰がチェックを入れたのか、名前に傍線が引いてあるので、実際に配布されたか不明である）、弟の建も文化事業に関する立場にいたことが分かる。調査報告書は大蔵省主計局、理財局、大蔵預金部資金局など19箇所配布され、同年3月には各在外公館（131館）に配布された。また、満洲帝国立中央博物館学芸学（動物学）木場一夫よりの礼状（昭和15年（1940）2月）も残されており、調査した当該の満洲方面への配布もあったことが分かる。



参考地図 洵が訪れた当時の中華民国と満洲国の都市（筆者作図）

と崇高なる人格の持主であられる」と触れられ、野外教練では率先して学生と起居を共にし、学生への影響力は絶大と評している。洵は満洲戦跡視察の話を教練時間にしたようで、「同氏は他に吹聴したり誌上に載せたりすることは好まれないのでありますが特に乞ふて茲に其御話の概要を記し」と断りがあり、寄稿文掲載は洵の本意ではないとする控えめな一面が窺える。加えて、堀井は洵について以下の話を紹介している（山川 1930: 39）。

常に青年の教化修養に最も効果ありとして特に日露戦史の研究に造詣と趣味を持たれて居ることは「年末年始の休みは徹頭徹尾戦史で暮した……机の上は本務の書籍より戦史の本で一ぱいだ」との一語でも充分分らせるゝことと存じます尚又今回の行は、「今頃の青年は彼の苦戦の実相を知らずになゞ連戦連勝といふ言葉にのみ眩惑されて居るから今回は特に先輩の最も苦戦とし又失敗した跡を視たり聴いたりするのが主目的であつた」と言はれて居りますが其の超越された着眼の程をも窺ふ次第であります。

38 偕行社は、明治 10 年（1877）2 月に陸軍将校の親睦のため発足した。当初は交際場である以上の活動はなかったが、明治 14 年（1881）に長岡外史らが始めた兵学の研究会・討論会「月曜会」の会員数増加に伴い（明治 20 年に 1 千 678 名、現役将校の過半数）、陸軍首脳は月曜会解散のねらいと「月曜会記事」を横取りする形で『偕行社記事』を刊行した。初期は、外国特にフランスの軍事に関する翻訳記事が多かったが、時局の求めに応じ、第一次世界大戦では欧州戦場の戦況や軍近代化をテーマにした論争が繰り広げられた。昭和初期、現役将校の減少（1 万 4 千人）、在郷将校（4 万 6 千人）の読者数減少（930 人）により、雑誌の刷新が図られ、昭和 5 年（1930）1 月より 3 倍近いページ数、口絵入りの月刊誌となり、読者数は増加していった。記事内容は軍事・教養に関する総合誌で、特集号（日露戦役、満蒙問題、満洲事変など）も出され、人気を集め、懸賞論文も募集された（森松 1990: 5～9）。すなわち、洵の寄稿文の掲載は、雑誌を刷新した直後であった。

洵は、日露戦争の研究に多大な興味を持ち、造詣が深かったことが分かる。実は、「支那及び満洲における淡水産魚介調査」の調査中にも戦跡巡礼を行ったようで、同行した弟子数人のなかには、娘婿の福田仁志（長女光子の夫）もおり、満鉄〔南満洲鉄道〕の人が世話してくれた小馬に乗って³⁹、戦跡を廻った逸話がある（紫水会編 1960: 56）。

『偕行社記事』の寄稿文は、日露戦争戦後 25 周年である昭和 4 年（1929）10 月、古戦場の干洪屯（奉天西側防衛地帯の一地点）を訪れた内容で、戦争当時の戦況が詳細に記され、彼の地で責任をとり自刃した大越忠孝少佐⁴⁰のことが記されていた。洵は、大越少佐を「死に直面して冷静に身を処すると云ふ事は頗る難事であつて、旗鼓喧騒の間に奮然突進して死につく事は難事の中の易々たるものであるが却て仮令重傷を負ふたといつても戦場から遠く離れて冷静に事後を処理して従容死につくと云ふ事は中々得やすからざるものである」と感嘆し、「覚悟は修養によつて得らるゝものである私は茲に干洪屯の苦戦を御話すると同時に諸君に平常の修養を怠られないやう切望する」（山川 1930: 43）と結んでいる。

洵は、昭和 6 年（1931）8 月の『偕行社記事』にも「^[シュゼンボ]首山堡南方高地に登りて」を寄稿した。文章は、東京帝国大学の構内の「市川紀元二」⁴¹の銅像の話から始まる。東京帝国大学の卒業生であった市川は一年志願兵の少尉で、日露戦争で歩兵第六連隊小隊長として首山堡を攻略し戦績を挙げ中尉に昇進したが、奉天会戦の干洪屯で負傷して戦死した研究者であった。

市川像は明治 41 年（1908）に建立されており、発起人は、当時東京帝国大総長の健次郎であった。市川の戦死の報を聞いた健次郎は「流涕嗚咽、言葉も出なかつた」（馬淵 1958: 6）。当時、学内には、大学は學術の淵藪であるので学術的に功績があるか、大学に功勞のある人でなければ銅像は建てないという意見も出たが、健次郎は異論を排し、「精神教育上、景仰せしむべきもの」として、銅像の建設を決めた（馬淵 1958: 29）という。結果、有志 457 名の寄付があり、学生の目に触れやすい運動場の一角に建設された⁴²。

洵は市川像について学生に所在を聞いたがその位置すら知らなかつたことに憤慨し、国家觀念が薄いことに言及している。「青年は徒らに軍国主義をそしり或は学校の教練等に反対し新聞は迎合的に軍縮を謳歌して居る。」（山川 1931: 12）と、当時の社会の不忠不信を歎き、「支那の軍閥とか大戦前の独逸の如く私腹を肥し或は他国を侵略せんが為めの軍備であるならば之は甚だよろしくない……即ち斯の如きは軍国主義の墮落であつて涓武主義⁴³である……然し我国の軍国主義は左様なものとは雲泥の差があつて所謂国防主義であるのである。此辺をよく考へる必要がある。／国に国防が充實して始めて外交も円満に行かうし外国の侮蔑もなく泰平を寿ぐ事が出来るのである。」（山川 1931: 12）と訴

39 弟子の麓は、乗馬中に麓の馬が動き出し、洵の馬にぶつかって馬具の締紐が切れ「さすが乗馬本分である工兵少尉の先生も、アッという間もなく、鞍もろとも落馬された。」（紫水会編 1960: 56）と回想する。軽い打撲で済んだらしいが、洵は「乗馬本分」であつたことが分かる。

40 1867～1905 年。福島県石城郡内郷村出身。日露戦争において広瀬武夫中佐、橘周大中佐と共に三軍神といわれたと『經國』6 卷 5 号に紹介されている。大越の娘きく子は板垣征四郎（陸軍大臣）に嫁いだ。昭和 3 年（1928）に福島県いわき市平の鎌倉神社内に銅像が建立された（經國社編 1939: 78）。銅像は現在存在しない。

41 1873～1905 年。静岡県出身で、第一高等学校を経て、明治 30 年（1897）に東京帝国大学工科大学電気工学科を卒業した。卒業後は、東京電気や小田原電気、京浜電鉄などの電気技師として電気事業で活躍していた（馬淵 1958: 9～11）。

42 軍服を着て、抜き身の刀をひっさげた勇ましい銅像である。太平洋戦争が激しくなり多くの銅像が供出された時も、戦後に軍服を着た銅像はみな葬られた時も、東大構内の市川像は職員の手により守り抜かれ、学内に保存されていた。昭和 33 年（1958）に静岡県護国神社（静岡市）に移転し（馬淵 1958）、現在まで至る。

43 「涓」について、新潮日本語漢字辞典には「ほんのわずかな量」とある。ゆえに「涓武主義」とは、徳義を重んじる武士道精神に悖る、ほどの意か。

えていた。洵は、国防の手段として軍備の充実を考える立場であった。

満洲国建国が宣言されてから、2年後となる昭和9年（1934）8月24日、25日付の神戸又新日報⁴⁴に、「第2回満洲産業建設学徒研究団」の記事が掲載された⁴⁵。新聞社が後援した研究団一行は、昭和9年（1934）7月16日に東京を出発し、8月14日に下関で解団した。団長は林毅陸⁴⁶、副団長が洵であった。他に東京帝大、京都帝大、九州帝大、千葉医大、慈恵医大、関西大学、東京農大などの教授陣22名、学生は564名の参加があった。

旅程は、20日ほどかけて大連から新京（長春）まで約700kmを視察した。記事によると、途中、専門学者が同行していたのに指導を仰ぐ機会が少なかったと学生から不満が出て、8月8日に新京にて教授陣座談会が開かれたという。その時、洵は「学徒研究団にあっては物質的指導教授を第二義的なものとし、まず、次の国家を負担する青年学徒に対しては、なにをおいても旺盛な愛国意識を扶植しこれを強調したいというにあり、それには研究団、今回の日程行事たる忠霊塔および神社等の礼拝戦跡の視察等を主要としたことを是認し、これによって、ややもすれば、不純に動揺せんとする青年学徒の思想体系を確立したい」との発言をした。

記者は「山川博士の「健全思想涵養工作」というものに、研究団の主要目的をおいた見解に対しては、あえて異論のあるべきはずはなかった。」と記してはいるが、望蜀の嘆としつつも、あまりにも広汎な地域を不眠不休的汽車旅行をするより、現地指導の余裕を獲得したかったと指摘する。忙しい日程で視察をこなしたことが窺える。

また、記事は広大な満洲国の不足を痛感し、移民問題、行政組織に関しても言及しており、「彼等の視察の結果に、たとひ結論を得なかつたにしても、新興国家から、なにものかを把握せんとしたその努力と熱意とを買ふ。これこそ、既成人に見る利慾と打算とを加味した巷間の調査視察類とは異なつたところの尊貴にして高潔な収穫だつたと確信する。さうして、それは未完成なものを完成へと導かんとする友邦人の情誼とも見られる。」とまとめられている。当時の満洲国への期待が読み取れる、この記事も洵も読んだであろうか。

6. 両親の死に接して

母の鉦は、大正5年（1916）3月に51歳で亡くなった。前年12月1日に健次郎に授爵の恩命があったが⁴⁷、この時、すでに鉦は病床に伏していた。同年11月10日の大正天皇御大典に参列するため、京都を訪れたあとから⁴⁸、体調を崩したという。検査の結果、胆石病と分かり、翌年1月より入院となるが、闘病むなしく亡くなった⁴⁹。葬儀には大正天皇貞明皇后両陛下、並びに祐仁親王より喪中御尋ねとして菓子折が下賜された（花見編1939：456）。

44 明治17年（1884）に神戸で発刊された日刊新聞で、昭和14年（1939）に廃刊した。

45 学徒研究団は全国の官私立大学および高等、専門学校生で構成され、第一分団は農・医・薬、第二分団は理・工、第三分団は外語・政・経、第四分団は高商を主体として国学院の神道部・美術・音楽と多方面に亘った。記者は特別報道班長伊藤金次郎とある。

46 大正12年（1923）より慶應義塾大学総長、終戦後は愛知大学（上海の同亜同文書院大学が前身）の初代学長を務めた。

47 この時、勲功の士として男爵を授爵されたのは9名であり、健次郎はじめ、穂積陳重、大倉喜八郎、大森鐘一、森村市左衛門、田中芳男、古河虎之助、三井高保、横田國臣であった（花見編1939：454）。

48 照子の回想録には「大正天皇、今上陛下の御大典の際、2回とも参列の光栄にあずかった両親と洵兄、建兄の京都の土産はやはり人形で…」（東1986：124）とあり、洵も同行したことが分かる。

49 健次郎は、鉦を悩ました胆石病の研究のため、大正7年（1918）、大正8年（1919）に胆石病研究奨励資金として金300円を三浦内科に寄付している（花見編1939：457）。

洵は33歳、末の妹照子はまだ18歳であった。鉦の死後、照子は相当落ち込んだが「お淋しそうな父上のお顔を見上げるとふさいでもいられない気になった私、父上を何とかしてお慰めしたいとおもう時、自分の寂しさ、悲しさはとんでいってしまう」（東1986: 149）と記しており、健次郎にとって、妻の死が大きな衝撃であったことが分かる。その姿を洵もまた傍でみていたであろう。健次郎は、その後、明治専門学校評議員や枢密顧問官、武蔵高等学校校長⁵⁰などを歴任し、昭和6年（1931）6月26日、77歳で死去する。鉦が亡くなってからの15年間は、洵の妻良が山川家の家事を取り仕切った。

健次郎が亡くなる前後のことは、『男爵山川先生傳』に詳しい。それによると、同年1月に耳の痛みを訴え、急性中耳炎で入院となり、続けて胃潰瘍を発症して治療に臨んだ。4月に退院となり、自宅で静養したが、またしても6月に胃潰瘍が悪化、肺炎も併発した。重篤の報に、枕元には洵と妻良、次女佐代子と夫寺野寛二、三女照子と夫東龍太郎、四男建夫人（建は外遊中）、甥の大山柏⁵¹らが詰め、健次郎の旅立ちを見送った（花見編1939: 465）。

健次郎の葬儀では、洵は世間に迷惑を及ぼすことと、名聞がましい事を嫌った父の遺志を尊重し、新聞広告を出さず、通知状も女婿（東龍太郎か）の名で出し、供物も辞退した。供物の辞退は、却って故人の徳を穢すもので極端だと非難があったらしいが、「天下は世を挙げて虚礼虚飾に陥り、葬儀の如きも徒らに外形的虚栄に走るの例が少くない。而して之を矯めんと欲せば、供物其他のものを絶対的に辞退するの他はない」との健次郎の遺志を洵は実行した（花見編1939: 468）と伝えられる。

健次郎が亡くなった後の洵について、「先生の厳父の山川総長が、枢密院副議長として軍縮条約の締結を遺憾としつつ亡くなられた後で、先生も往年の意気を失われたというのが、教室の古い教員の山県氏などの意見であった。」（紫水会編1960: 53）とあり、父を亡くし意気消沈する洵の姿が窺える。

明治45年（1912）に発足した「會津會」がある。明治中期より、小石川小日向第六天町（現東京都文京区）にある子爵松平保男（会津藩9代藩主松平容保の五男）の屋敷に会津出身者が集まり、春秋2回の懇親会を開いていたが、「會津會」発足の発議があり組織された。健次郎は松平家の家政顧問をしていた。

「會津會」は会報を発行しており⁵²、会津出身者の随筆や思想、意見、近状、子孫動向などが掲載され、現在125号まで発行されている。現在の会員は800名を数える。健次郎は「會津會」を「同郷人の切磋琢磨の機関」（會津會編1912: 5）と考え、発足当時の中心メンバーとして会報に多くの投稿をした⁵³。

50 武蔵高等学校校長として、大正15年（1926）4月7日～昭和6年（1931）3月10日まで勤めており、死の直前まで職務を果たしていたことが分かる。

51 1889～1969年。陸軍少佐、考古学者。健次郎の甥であり、妹捨松と大山巖（陸軍大将）の次男。大山家と山川家のつながりについては拙著（遠藤2019）に詳しい。また、今回の調査で「大山家から頂いた毛布があった」という思い出が健次郎曾孫の三木邦夫氏、ミワ曾孫の鶴沢佳子氏に共通して残っていたことが明らかになり、親戚同士の交流が確認できた。

52 創刊当初は『會津會々報』であったが、途中『會津會雜誌』（大正14年（1925）～）との改名を経て、現在『會津會会報』に戻された。昭和17年（1942）に戦時の用紙統制で60号にて休刊したが、昭和25年（1950）に雑誌名を戻して復刊した。発行は当初は年2回（6月と11月）であったが、復刊後は年1回となった。活動としては、戊辰殉難者の法要や慰霊祭、墓前祭、会津松平家に関する大祭など年15回程度の行事と年2回の会合（新年会、総会）がある。現在の事務局は文京区千石にある会津学生寮内にある。大正6年（1917）に会津出身の学生のための寄宿舎として健次郎が中心となって設立した。寮名の「至善寮」は健次郎が名付けた。現在の入寮規則も会津出身者・保護者が会津出身者に限られ、定員35名、これまで1350名を輩出した。

53 例えば、1号、2号、11号、12号、13号、21号、22号、25号、29号、32号、33号、37号に投稿しており、ほとんどが『男爵山川先生遺稿』に所収されている。

会報 39 号（昭和 6 年（1931）刊）は、「山川健次郎先生追悼談」を特集している。同年 10 月 26 日、伝通院にて「山川男爵追悼会」が営まれ、その夜の晩餐会（於西川楼）では柴五郎⁵⁴をはじめ、多くの追悼の逸話が語られた。その追悼談が会報の特集となったのであるが、最後に洵による「礼状」が付記されていた。

追悼会には洵をはじめ、妻良ら家族 6 名が出席したとある。100 名以上の出席者があり、晩餐会にも 80 名の出席者があった。出席者名簿には、松平保男、柴五郎をはじめ、松江春次⁵⁵、井深勝治⁵⁶、外島政衛⁵⁷など錚々たる顔ぶれの旧会津藩出身者の名前があり、洵は故人の家族として松平子爵と共に上座にあがった（會津會編 1931: 74）。

翌年、会報 40 号の新入会員には「山川洵」の名前が見え（會津會編 1932: 61）、健次郎の跡を継ぐ洵の責任感と誠実な人柄が推察できる。

7. おわりに—山川洵の人物像について—

洵は、昭和 14 年（1939）に池袋から板橋区（現練馬区）に引っ越した。戦時中、妻良と子ども達は栃木県馬頭に疎開していた（桜井 1968）。疎開の前か後かは不明だが、洵は、昭和 18 年（1943）3 月 21 日、61 歳で病没した。東京帝国大学退職の日付も同日で、3 月 31 日に予定されていた定年退官直前の他界であった（山川 1944: 161）。健次郎の死から僅か 12 年後であった。健次郎の山川家は、洵の死後、爵位を返上した⁵⁸。晩年の良と一緒に過ごした孫の三木邦夫氏は、祖母良から祖父洵は礼儀正しい人であったと伝え聞いている。邦夫氏から、戦時中に亡くなった洵について「良は、夫は戦争の結果を知らないで良かったと言っていた」と筆者は伺った。洵の一番近くにおいて、水産学者としてだけでなく、戦史や満洲に多大な関心を持っていた洵を知っていた良だからこそその意見であると了知した。また、健次郎の存命中は、「どんなに遅く帰ってきても、健次郎が寝ている部屋の前の廊下に向かい、洵と良の夫婦は三つ指をつけて「ただいま帰りました」と挨拶をしていた」と邦夫氏から伺った。日常生活での父への敬意が窺える。

一方、父健次郎は子どものことをどう思っていたのであろう。大正 5 年（1916）7 月 11 日に行われた東京帝国大学の学士会総会での演説に於いて、国を維持するのに必要な条件のひとつとして「人口」についての内容が語られた。「古来には学者には子少なし」という諺から、江戸時代の学者の妻帯者や子どもの数をデータで分析し、高等教育を受けた人は、余り晩婚に陥らないようにするのが国家の義務であると説明した。それは、妻子があると奮闘努力が鈍る、妻子があると生活に骨が折れる、楽をしたさに妻子を持たぬというのは亡国の民であり、「妻子があつて骨が折れるなら、益々奮闘努力すると云ふのが生氣ある国民の勤である。或る歌人は「ますら武男の持つまじき、宝は妻と子にこそありけれ」歌ひましたが、妻子の恩愛にひかされ、勇気の鈍るのは真のますら武男ではありません。我が輩は「ますら武男の持つべきは、妻と子と云ふ宝なりけり」と云ひたいと思ふのであります。」

54 1860～1945 年。会津藩出身者で初めての陸軍大将となった。

55 1876～1954 年。第一次世界大戦後、サイパン・テニアン・ロタ島にて国策会社南洋興業を創業し、製糖事業を展開、南洋諸島の教育と医療施設の充実に尽力し、砂糖王の異名をとった。兄の豊寿は陸軍少将で、板東俘虜収容所所長、若松市長を歴任した。

56 井深家は 550 石の小姓であった。一族には明治学院 2 代総裁井深樞之助、ハンセン病治療に尽くした看護師井深八重、ソニー創業者井深大などがいる。

57 外島家は 200 石で勘定奉行助、学校奉行助、江戸留守居役など要職にあった。一族には会津藩の公用人として活躍した外島機兵衛がいる。

58 洵と良の子ども（5 人姉妹）については、拙稿（遠藤 2020: 50～51）を参考されたい。全員、他家へ嫁いでいる。

(山川 1937: 231) と演説した。健次郎は、多方面で他分野に亘って演説をしているが、歴史や教訓、思想以外の内容は珍しい。この時は、健次郎の妻鉦が亡くなって4か月後であったので、鉦のことを思っただけの内容でもあったろうが、子は宝という健次郎の子どもへ抱く想いも読み取れる。

本稿における洵に関する調査では、親と比較されたり、健次郎の長男であると紹介されたりする資料がいくつもみられた。洵の行動や研究活動には、いつも「山川健次郎の長男」という世間の評価がまわりついていたと推察する。それは、一般的に、信頼できる人物の証左でもあり、親の七光りともいわれるような意味でもある。偉大な父を持った洵が、その境遇をどう自分のなかで消化していたのか、知る術はない。このようななか、今回の調査過程で、ある史料(本稿では「業績リスト」と称する)を入手した。

表紙には「昭和6年8月2日調 父上様原稿一覧」とある。全26頁(1頁10行)の史料で、本文は筆字で、欄外の上に赤字、欄外の下に鉛筆書きで書き込みがある。内容は健次郎の「業績リスト」であり、本文は年月日、名称(タイトル)、記載書、場所(出版社)、備考の順にまとめられていた。史料には、記名はないが、表紙に「父上様」とあるので、健次郎を父と呼んだ人物がまとめたものと考えられる。洵が外務省に提出した「履歴書」と史料を照らし合わせると、筆跡が似ている箇所が多く見られる。

これについて、例えば「業績リスト」と遺稿集である『男爵山川先生遺稿』に所収された原稿を照らし合わせると、「業績リスト」のほとんどが遺稿集所収のタイトルと重なった(所収されていないタイトルもあった)。遺稿集は、各雑誌に掲載された健次郎の自叙伝や思想、東京帝大・京都帝大・九州帝大・武蔵高校・明治専門学校での講演記録など、健次郎の業績のほとんどがまとめられた全780頁の貴重な一冊である。

『男爵山川先生遺稿』は昭和12年(1937)に発刊したが、それ以前、遺稿集を編集するために、「男爵山川先生記念会」が発足している。遺稿集の緒言には、「同郷にして近親なる飯沼関弥⁵⁹氏が独力先生の遺稿・論講等を集めて出版せんとするの計画あるを聞き」、「氏に請ひて、その蒐集に係れる先生の遺稿等の全部を譲受け、尚ほ更に獲るに従つてこれに追補し…」(山川 1937: 1)とあり、飯沼関弥が遺稿集の編纂を始め、それを記念会が譲り受けたことが分かる。史料は、洵の従弟にあたる桜井^{つとむ} 60が所蔵していた。関弥は懋の義父でもあるので、最終的に懋の手元に残ったのであろうか。何故懋が所蔵することになったのか、懋の孫(かつ関弥の曾孫)である鶴沢氏に伺うとその経緯は伝えられていなかった。「業績リスト」をみると、欄外の下に鉛筆書きは数字で、遺稿集の収録条目と一致していた。数字はいつ誰により、書き込みがなされたのか。

これについて、健次郎の伝記である『男爵山川先生傳』には「男爵山川先生記念会」による凡例があり、ここには「本書の編纂に當つて山川先生の令嗣男爵洵氏が、もともと他に示すべき性質のものでない先生の日記及び先生令夫人の日記の謄写を快諾せられ、その他先生充ての書状、新聞の切抜帳等を挙げて貸附せられるなど、本書の編纂に絶大な援助を与へられたことは、非常な便益を得たもの

59 1863～1949年。会津藩士で、明治末期～大正期に23年間会津松平家家令を務めた。兄は白虎隊で自刃し生き残った飯沼貞吉(1854～1931年)、母文子は西郷近登之の三女で姉は艶、ゆえに健次郎の従弟にあたる。昭和13年(1938)に『会津松平家譜』を著している。

60 1887～1972年。健次郎二姉ミワの四男。北海道根室市生まれ。北海道師範学校卒業。小学校教師を経て、大正5年(1916)に健次郎の世話で明治紡績合資会社(福岡県戸畑市)に就職した。大正7年(1918)に檀(1889～1962年、飯沼関弥長女)と結婚、2女に恵まれた。福岡で20年以上過ごしていたが、子どもの教育のため上京に至った(桜井1968)。

である。」(花見編 1939: 3) とあった。

これらから、「業績リスト」は洵が作成したものと仮定すると、洵は父の死後すぐに父のこれまでの業績が散逸しないよう、資料を整えていたことになる。思えば、洵が『偕行社記事』に、健次郎が銅像建設に尽力した市川紀元二の逸話を寄稿したのはリスト作成と同時期で、そう考えると、父の業績を思い起こさせようとする内容とも読める。洵は、死に直面するとき冷静でいられるように「平常の修養を怠られないやう」(山川 1930: 43) と訓戒している。健次郎が亡くなった後、往年の意気を失ったといわれた洵であったが「官報を調べて一回の見逃がしもない切手と記念スタンプの収集にその片鱗は残っていた。」(紫水会編 1960: 53) という弟子の逸話が残っている。父の逝去を受けて、小まめに父の「業績リスト」をまとめる作業をしながら、父の人生を辿り、思いをめぐらせる洵の姿が彷彿としてくる。

洵は、偉大な父を持っていた。明治期以降の日本の学者・教育者を代表する著名な父であった。洵自身も父を尊敬し、健次郎の長男として恥じないような行動があり、かつ出過ぎることのない控えめで、実直な性格であったことが推察される。

しかし、洵の経歴を辿ると、水産講習所と東京帝国大学に二つの研究室を持ち、水産に関する多くの論文が所在し、後進の育成にも尽力し、戦史の研究にも長け、満州問題への関心を持ち、軍縮や軍国主義などについて言及することで当時の社会や軍人に意見を投げかけ、研究者・教育者・文化人として、洵自身も大きな功績、実績を残していたことが具体的に分かった。洵は、健次郎の長男としてしか歴史書に名を残していなかったが、調査により、彼が日本における水産学分野の優れた研究者であり、教育者であったことを明らかにし得たと思う。

今後の課題として、健次郎の「業績リスト」について、内容を精査し分析する予定である。引き続き、会津出身の山川家の明治期以降の展開についての調査を進めていきたい。

【付記】

本論文を作成するにあたり、鶴沢佳子氏(飯沼関弥曾孫、桜井懋孫)、梶井英二氏(梶井恒曾孫)、田沼幹子氏(会津会事務局)、古川富弘氏(会津若松市)、中野健氏(中吉旅館子孫)、三木邦夫氏(山川健次郎曾孫、山川洵孫)、増井喜彦氏(静岡市)、山岸良二氏(元東邦大学付属東邦中学校高等学校)(50音順)に大変御世話になりました。記して御礼申し上げます。

【引用文献】

会津會編 1912『會津會々報』第1号 會津會。

会津會編 1931『會津會雜誌』第39号 會津會。

会津會編 1932『會津會雜誌』第40号 會津會。

東照子 1986『吾亦紅』(私家版)。

遠藤由紀子 2010「会津藩家老梶原平馬をめぐる女性—山川二葉と水野貞と「仕事」—」『女性と仕事』昭和女子大学女性文化研究叢書第7集、御茶の水書房 221~249頁。(『女性文化研究所紀要』35号(2008年)の掲載論文に大幅な加筆・修正を行ったもの)。

遠藤由紀子 2018「会津藩家老山川家の明治期以降の足跡—次女ミワの婚家・桜井家の記録から—」『女性文化研究所紀要』45号 13~36頁。

遠藤由紀子 2019「陸軍大将・大山巖に嫁いだ捨松の生涯—日本初的女子留学生から近代国家の貴婦人へ—」『秋

- 山好古と習志野騎兵旅団』雄山閣出版 49～80 頁。
- 遠藤由紀子 2020「山川良に関する研究—男爵山川健次郎長男洵の妻の記録—」『女性文化研究所紀要』47 号 37～54 頁。
- 大竹正容, 森武久他編 2013『評伝山川健次郎—士君子の肖像』山川健次郎顕彰会。
- 岡徹 1926「夏の三崎」『動物學雜誌』38 卷 455 号 322～324 頁。
- 外務省 1941「大陸魚類ノ化学的研究事業助成」『研究助成関係雑件』第八卷 外務省外交史料館。
- 影山昇 1996『人物による水産教育史研究』東京水産大学博士学位論文。
- 九州大学編 2011『九州帝国大学初代総長山川健次郎』九州大学百周年記念事業推進室。
- 經國社編 1939『經國』6 卷 5 号 經國社。
- 桜井懋 1968「吾が家の記録と吾がたどった道」(私家版, 原本を筆者翻刻)。
- 紫水会編 1960『東京大学農学部水産学科の五十年』東京大学農学部水産学科創立五十周年記念会 (麓禎康「山川洵先生の思い出」53～57 頁)。
- 人事興信所編 1928『人事興信録第 8 版』人事興信所。
- 第七高等学校造士館編 1915『第七高等学校造士館一覽』第七高等学校造士館。
- 大日本実業学会 1926『実業之日本』第 29 卷第 15 号 39 頁。
- 第六高等学校編 1913『第六高等学校一覽』第六高等学校。
- 田賀井篤平 2006「田中館愛橘とアインシュタイン」『時空のデザイン』展図録 東京大学総合研究博物館。
- 帝国秘密探偵社編 1930『大衆人事録』第 3 版 帝国秘密探偵社。
- 東京大学百年史編集委員会編 1987『東京大学百年史』部局史 2 東京大学出版会。
- 花見朔巳編 1939『男爵山川先生傳』故男爵山川先生記念会。
- 星亮一 2003『山川健次郎伝—白虎隊士から帝大総長へ—』平凡社。
- 馬淵逸雄 1958『工学士市川紀元二中尉』五穀記念館建設協賛会。
- 森松俊夫 1990『『偕行社記事』の意義』『偕行社記事』目次総覧別巻 大空社。
- 山川健次郎 1937『男爵山川先生遺稿』故山川男爵記念会。
- 山川洵 1930「干洪屯の戦跡を訪ねて」『偕行社記事』668 号 (昭和 5 年 5 月号)。
- 山川洵 1931「首山堡南方高地に登りて」『偕行社記事』683 号 (昭和 6 年 8 月号)。
- 山川洵 1939「満洲國及中華民國に於ける魚介の研究」『支那調査報告第 2 冊』外務省文化事業部。
- 山川洵 1944「大陸産淡水魚に就て」『水産學會報』第 9 卷第 2・3・4 号 161～253 頁。
- 吉井樽雄 1928「三崎雜報」『動物學雜誌』40 卷 480 号 429～431 頁。
- 渡辺健 2014「米国における山川健次郎の足跡を追って」『山川健次郎と藤田哲也～工学教育の先駆者と竜巻研究の開拓者～』北九州産業技術保存継承センター。

(えんどう ゆきこ 歴史文化学科)